
Hand Made

紅茶大全

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Hand Made

【ZPDF】

Z0923U

【作者名】

紅茶大全

【あらすじ】

ひらり
しゅぴつ
ひらり

それだけで十分に美しい

(前書き)

超・短編です。

酔っぱらった頭で僕はそれを眺めていた。
ひらり、ひらりと舞うそれを眺めていた。

〔 Hand Made 〕

頭を預けている手すりからは電車がレールを踏む振動が伝わってきている。それが酔った僕のなかで小さくしかし確かにさざ波を引き起こしているようだった。

金曜日の夜遅い電車には喧噪が溢れている。酒の匂い、たばこの匂い。酔った勢いでボリュームの調整が利かなくなってしまったのか大声でしゃべる大学生たち。

それらが同じように酔った僕の頭の中で反響して頭痛を引き起こし不快だった。

新宿で大半の人がありてしまつと、中野行きの総武線はだいぶ人が減つたように思えた。そうして人が減つた車内のドア付近に僕はそれを見つけた。

ひらり
しゅびつ
ひらり

そういう擬音が似合いそうな動作だった。

手のひらが踊り、不思議な形を連続して創り出していく。

手話だ。

そう気づくまでにしばらく時間がかかった。

若いカップルの間で手が踊っていた。人は減つても未だにざわついている車内で繰り出される手話の会話だけが、静謐を保っていた。

綺麗だな、と思った。

彼らにしか分からない言語で語り合い、時々一人同時に肩をふるさせて笑っている。その光景がたまらなく綺麗だと思つた。

それはすごく神秘的で、自分には手を伸ばしてもどどかない領域のようだつた。

気がつけば頭痛が消えていた。

手話の会話に集中しているうちに周囲の喧噪はフェードアウトしてしまつたようで、彼らが大久保で降りてしまつたあとも頭痛は復活せずに、僕の中のざざ波も収まつていた。

* * * * *

そのカップルと再会したのは数日後だった。

場所はライブハウス。

秋葉原の一角にあるライブハウスではその日も爆音でライブが始まっていた。入場料はなくカンパ制のライブだったため入りやすかつたのだろうか、男の方が女の手を引っ張つて中に入ってきた。

音のない世界にいるはずの彼らがどうしてライブハウスにやってくるのか、僕にはわからず自然と目で追いかけてしまう。

彼らは人をかき分けて前の方にいくとスピーカーの目の前に立つた。そして目の前に手を伸ばしたりお腹をさすったりしている。

不思議に思つて彼らのところに近づいてみると疑問はたちまち氷解した。

振動だ。

巨大なスピーカーから繰り出される低音は揺れ幅が大きいため床をふるわせ内臓を揺さぶつてくる。

音は 振動だったのだ。

彼らは音楽を楽しんでいた。

女の方が男の肩をたたいて、それから自分の耳を指さして何かを表現している。それをみた男は、親指と人差し指を摘むようにして、おでこにつけ、離すと同時に手を開いて着るような仕草をした。手話を知らない僕でもその意味はわかった。

「ごめん」だ。

二人は連れ添つてライブハウスを出していく。爆音で耳をやられそうになつた女は頭を振りながら、内臓で音楽を感じた耳の聞こえない男は笑いながら。いいカップルだな、と耳鳴りがしそうなヘビメタのなかで僕はそ
う思つた。

(後書き)

いつも、紅茶大全です。

前にバベルという映画をみました。

言葉が通じず、わかりあえない、いや言葉が通じていても分かりあえない人々を描いた映画だったけれども、その中で、菊地凛子が演じる聾啞の少女が、いきなり全裸になつて相手を求めるといつシーンで驚嘆した覚えがあります。

言葉という形而上のコミュニケーションではなく肉体をさらけだして肉体的コミュニケーションを求める。考えれば当たり前のことでけれども、その映画の中では彼女の全裸だけが凄い異質でした。

あの映画をみてからしばらく経ちますが、この前久しぶりに手話を目の当たりにしたときに、言語を肉体化しているという事実に尊敬の念を抱きました。大胆に奇想天外すぎて。

思えば、あの映画の中でもまともなコミュニケーションをとつていたのは聾啞の少女たちではなかつたか、言いたいことを言い合つて笑いあつていたのは彼女たちだけかもしれない、とも思いました。

その後、手話が各国で違うという事実をしつて落胆したりしましたが、それでも私の手話への尊敬は変わりません。

時々、手話で会話している人たちに町中ですれ違うと、彼らの周りには僕らの周りはない静かさと暖かさがあると感じます。私はそれがとても羨ましいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0923u/>

Hand Made

2011年6月16日18時56分発行